

第8回国立国語研究所国際シンポジウム報告

著者	米田 正人, 前川 喜久雄, 宇佐美 洋, 佐々木 倫子
雑誌名	日本語科学
巻	9
ページ	169-177
発行年	2001-04
URL	http://id.nii.ac.jp/1328/00002063/

第8回 国立国語研究所国際シンポジウム報告

「東アジアにおける日本語観国際センサス」

平成12年9月20日(金) 国立国語研究所講堂

参加者：75名

国立国語研究所が中心となって世界28の国と地域で行った「日本語観国際センサス」の結果について、対象を東アジア（日本、韓国、中国、台湾）とシンガポールに絞って、4つの研究発表とパネルディスカッションを行った。発表およびパネルディスカッションの概要は以下のとおりである。

日本人の外国語観（江川 清，国立国語研究所情報資料研究部）

外国語ということばを聞いて思い浮かべる言語，過去に習った外国語，現在習っている外国語，将来習いたい外国語など，すべて英語が圧倒的比率を獲得していることを指摘した。また，自国で外国人と話すとき，日本では日本語で話したいという人が多いのに対し，シンガポールやフィリピンなどの多言語国家では母語で話したいという人の比率が低いこと，実際に何語で話すかという問いに対しても日本，中国，韓国では母語で話すという回答比率が高いのに対し，シンガポールでは外国語で話すという回答比率が高いという点を指摘した。さらに，韓国，シンガポール，台湾などで日本語学習意欲が高いのに対して，日本人のアジア言語への関心の低さについても言及した。

中国における日本語普及に影響する要素（劉 志明，中国社会科学院）

中国調査の概略を説明した後，日本語教育・普及に影響を与える要素として以下の4点を指摘した。東北3省（黒竜江省，吉林省，遼寧省）で日本語学習意欲が高いが，それらの地域においても最近では英語学習の意欲が高まっていること〔日本語の普及と地域性〕，日本語学習意欲の高い人のなかに高学歴者と若者が多いこと〔教育水準の上昇と日本語の普及〕，大連を例に，日系企業への就職や日系企業の開設する日本語学校の影響により日本語学習意欲が高まったこと〔経済交流の拡大と日本語学習〕，台湾を例に，「日本訪問経験の有無」「日本への訪問意向」が日本語学習意欲と密接に関係していること〔人的交流の拡大と日本語学習〕。

韓国人の生活のなかで使われている日本語の一実態（姜 錫祐，韓国カトリック大學校）

韓国人の日常生活の中に，原音そのままの日本語が韓国語に混ざって使われているという状況がある。「玉葱」「沢庵」「スリッパ」「楊枝」「テレビ」「爪切り」「カラオケ」などは世代を越えて使われ，日本ではほとんど使われなくなった「おじゃみ」も広い世代で使われているという。報告では日本語観国際センサスで行った言語意識に関する調査結果を踏まえつつ，姜氏自身が行った日本語使用に関する調査結果を概観し，韓国人の日本語使用・日本語理解の実態を示した。

民族別にみる日本語教育（葛 駿鋒，元シンガポール国立大学）

中国系77%，マレー系14%，インド系8%，その他の民族1%，および80万人の外国人労働者を含め、総勢400万人の住民からなる多民族・多言語国家のシンガポール。そのシンガポールにおける日本語のイメージ、日本語学習について、民族別の分析結果を提示した。マレー系の50%近く、中国系の40%近くが、一番流暢に読み書きする言語を英語としている点、国立図書館で1年間に貸し出された英語の図書が中国語の図書の10倍にのぼる点、唯一の中国語新聞「聯合早報」の購読部数が10年間で半減している点などを例に、シンガポールでの日常生活の言語はかなり英語になっている点に言及した。また、日本語のイメージについては総じてマイナスイメージが強いこと、高齢者ほどその傾向が顕著なこと、しかし諸外国に比べて日本語学習意欲は非常に高いことなどを報告した。

パネルディスカッション

司 会：菅井英明（国立国語研究所日本語教育センター）

問題提起：米田正人（国立国語研究所言語教育研究部）

パネラー：李 漢燮（韓国高麗大校）

劉 志明，葛 駿鋒

問題提起としてまず以下の3点が指摘された。

1. 韓国，中国，台湾，シンガポールでは日本語が英語に次ぐ第二外国語としての地位を確立しつつあるように思われる。このことはどう認識されるべきか。
2. 日本語観および日本人に対するイメージは4地域で異なる様相を呈している。日本語の第二外国語としての地位がこれから確立される，またはすでに確立されているのであれば，これらのイメージと第二外国語としての日本語の地位はどのような関係にあるのか。
3. 日本人との接触方法，日本語使用の状況が4地域で異なっていると思われる。この違いが日本語観および日本人イメージにどのような影響を与えているのか。また，新世紀に入り各地域がグローバル化し，観光，経済，学术交流の機会が増大し，日本人との接触方法の変化などが見込まれているなかで，日本語観，日本人イメージがどのように変化しうるのか。

各パネラーからは、「韓国における日本・日本語のイメージと日本語教育との関連について（李漢燮）」「中国における日本・日本語観（劉志明）」「シンガポール社会の言語生活（葛駿鋒）」「台湾における日本語の地位とその将来（菅井英明）」と題するコメントがあり，それらの観点を中心に，会場の参加者と共に活発な討議がなされた。

シンポジウム「東アジアにおける日本語観国際センサス」は今回で3回目となる。13年度中に，それらの成果を1冊の報告書として刊行する予定である。

米田 正人（言語教育研究部）

専門部会

「自発音声韻律ラベリングワークショップ」

平成12年11月14日(火), 15日(水) 国立国語研究所第一研修室

参加者：48名

事前にかかれたテキストを朗読した音声と、発話の場で内容を考えながら発音される自発音声との音声特徴を比較すると、種々の面に顕著な差を生じることが知られている。本ワークショップでは自発音声のデータベース構築を念頭において、イントネーションなどの韻律特徴をどのようにラベリングするかという問題を検討するために開催された。

現在、韻律ラベリングを実施する場合、実際上の標準となっているのは、ToBI (トビ) と呼ばれる手法である。英語版 (E_ToBI) に加えて日本語版 (J_ToBI) が提案されており、その他の言語についても開発が進んでいる。しかし、現在の ToBI は基本的に朗読音声を対象として開発されているので、これを自発音声に適用すると、どのような問題が生じるかを洗い出すことがワークショップの具体的な目的である。そのため、あらかじめ国語研究所で用意した5分間ほどの自発音声を参加者に配布して、現在の J_ToBI に従ってラベリングしてもらい、事前に提出していただいたラベリング結果を当日検討するという形式を採用した。

宿題付きのワークショップであったにもかかわらず、国内外から多くの方々に参加していただき、二日間にわたって大変活気のある議論をおこなうことができた。

初日は午後からの開催であり、現在の J_ToBI マニュアルの執筆者であるアメリカ・ラトガース大学の Jennifer Venditti 博士の講演と質疑応答に続いて、国語研究所の菊池英明から宿題の分析結果が報告された。

二日目午前中と午後の前半には、20名あまりの宿題の提出者が作業上の困難点やその解決方法について、適宜質疑応答をはさみながら報告をおこなった。

同日午後の後半は、それまでに明らかになった種々の問題点のうち、現時点で解決策の提案が可能と思われるものについて国語研究所側から提案をおこない、その可否について討論した。

宿題の分析結果の一部は日本音響学会で発表しているので、興味のある方は下記をご覧ください (菊池・籠宮・前川・竹内「自発音声に対する J_ToBI ラベリングの問題点検討」日本音響学会講演論文集, pp.383-394, 2001年3月)。

前川 喜久雄 (言語行動研究部)

専門部会

「日本語とアジア諸語との対訳作文コーパス：対照言語学・日本語教育への応用」

平成12年12月14日(木), 15日(金) 国立国語研究所講堂

参加者：約150名

現在国立国語研究所では、「日本語学習者による作文と、その母語訳との対訳データベース」というデータベースを作成している。このデータベースは、

1. 日本語学習者による日本語作文
2. 作文執筆者本人による母語訳（またはもっとも楽に文章を書ける言語への翻訳）
3. 日本語教師による作文の添削
4. 作文執筆者・添削者の言語的履歴に関する情報

という4種類のを大量に収集し、電子化した上でhtmlによるインデックスをつけ、簡便な検索を可能にしたものである。

1999年度にアジア7か国（インド・ヴェトナム・韓国・カンボジア・シンガポール・タイ・マレーシア）から800名分の日本語作文を集め、2000年8月にはデータベース ver.1 を試用版としてCD-Rの形で公開した。

このデータベースは、日本語と他の言語との対照研究や、誤用分析・母語干渉に関する研究、またそうした知見に基づく日本語教育への応用研究など、さまざまな方面の研究へと発展させていくことが可能である。そして、ひとつの素材をさまざまな用途に用いることができるということは、そこに研究者同士の新たな交流を生み出す契機にもなると考える。

言うまでもないことだが、日本語教育という分野はそれ自体きわめて多様な学問分野を包含している。しかし残念なことに、多くの研究者はその多様な、細かな学問分野の中に閉じこもりがちで、日本語教育全体を見渡すような視点というものはない。なかなかもちにくい。

こういう状況に少しでも風穴を開けるためには、さまざまな分野の研究者が一同に会し、ひとつの素材に対し多様な角度からものを言えるような機会をもつ、ということがきわめて有効であろう。そこでわれわれデータベース作成グループは、「対訳データベース」というひとつの素材をめぐる国際シンポジウムを企画した。

2000年8月に試用版データベースを完成させ、これをアジア各地の研究者・教育関係者に広く配布し、あわせてこのデータベースを用い、ご自分の関心に沿っての研究発表をお願いした。その結果、アジア6カ国から22名の研究者の方に名乗りを挙げていただき、18の研究発表をお願いできる運びとなった。

シンポジウムは、2日間にわたって以下3つの部に分かれおこなわれた。

- 14日 第1部「データベースの基礎設計」
第2部「データベースによる対照言語学的研究」
15日 第3部「データベースの日本語教育への応用」

それぞれの部において、発表20分、質疑応答10分という時間配分で研究発表をお願いした。さらに、2つないし4つの発表をひとつの「セッション」としてまとめ、1セッションが終了した段階で、司会者とセッション参加者との間で「ディスカッション」の機会を設けた。この時間は、分野を異にする参加者同士の間での交流を促進するという目的のために設けられたもので、司会者が1セッションでの発表者全員に対して共通の問いかけをおこなったり、フロアに対しても意見を求めたりすることにより、できる限り多方向的な議論が可能になることを目指した。

以下、実際の発表題目とその概要を紹介する。

第1部「データベースの基礎設計」

中山 智哉・佐野 洋（東京外国語大学）「多言語作文コーパスデータベース—設計と実装について—」
多言語作文コーパスを「関係型データベース」を用いてより有効に活用するための方策の提言がおこなわれた。

佐野 洋（東京外国語大学）「WWW-DB 連携多言語作文データベースの開発」
ソフトウェア再利用というパラダイムを用いたソフトウェア構築法の開発事例が報告された。

第2部「データベースによる対照言語学的研究」

曹 大峰（山東大学）「作文コーパスによる日中モダリティ表現の対照研究—確言と概言—」
日中両言語の判断表現を比較し、日本語では概言に、中国語では確言に傾いた表現が多用される傾向にあることを述べた。

張 建華（南開大学）「誤訳に見られる言語行動様式の文化的相違—許可表現“可以”と“～でもいい”をめぐって—」
中国語の“可以”を日本語に翻訳するときの適訳は状況によって異なるが、それは許可をめぐる言語行動様式が日本語と中国語で異なるためであることを示した。

高橋 清子（チュラロンコン大学大学院）「タイ語の cuɯŋ を含む因果関係表現とその日本語対訳の対照研究」
タイ語の cuɯŋ の意味機能を日本語対訳との対照によって分析し、cuɯŋ が表示する「因果関係」の性質について論じた。

ソイスダー・ナラノーン（カセサート大学）「タイ人日本語学習者による誤用—「の」について—」
タイ人日本語学習者による「の」の誤用を分析することにより、日本語の「の」とタイ語の“khong”の意味・用法の共通点と相違点について考察した。

趙 南星（大田産業大学校）「韓国人学習者の日本語作文に見られる誤りの原因」
韓国人学習者が日本語作文でおこなうさまざまな誤用を分析し、なぜそのような誤りが生じるのかを対応する韓国語表現を挙げて説明した。

関 光準（建国大学校）「韓国人学習者の日本語作文に見られる母語音声の干渉」

韓国人学習者が日本語作文でおこなう誤用の中から、特に母語音声の干渉によるものと思われるものについてその実態を分析した。

李 漢燮（高麗大学校）「韓国人学生の日本語作文における語種の選択について」

韓国人・中国人・インド人学生の作文で使用されている形態素の語種を調査し、漢字圏の学習者は漢語を多用する傾向があることを示した。

第3部「データベースの日本語教育への応用」

大北 葉子（シンガポール国立大学）「漢字の書き誤りが漢字教育に示唆すること」

各国の学習者の漢字の書き誤りについて分析し、書き誤りの性質の違いについて考察した。またその考察に基づき、漢字教育に対する提言をおこなった。

プレム・モトワニ（ジャワハルラル・ネルー大学）「日本語学習者の語彙選択の問題について」

インドの学習者が日本語の語彙を適切に選択できない例を多数挙げ、その理由について考察をおこなった。

大塚 薫，李 暉洙（韓国放送通信大学校）「韓国人日本語学習者の語彙認識に関する一考察—和語系統の語彙と漢語系統の語彙の提示方法に関する考察—」

韓国語母語話者にとっては日本語の和語系語彙より漢語系語彙の方が認識しやすいことを示し、韓国語母語話者用に特化した語彙集作成の必要性を述べた。

タサニー・メーターピスィット（タマサート大学），坂田 睦深（東京学芸大学），アルニー・チュン シリウィロート（麗澤大学大学院）「タイ人日本語学習者のアスペクト表現」

タイ人学習者による日本語アスペクト表現の分析により、日本語とタイ語のアスペクト体系の違いを示すとともに、タイ人に対する効果的的作文指導法についても述べた。

張 興，徐 一平（北京日本学研究センター）「中国人の作文コーパスにおける命題目当てのモダリティ表現について—中国語との対照を含めて—」

中国語話者の作文に使われている命題目当てのモダリティ表現を取り上げ、どのような命題目当てのモダリティ表現が中国人学習者によって多用されるかを示した。

顧 偉坤（上海外国語大学）「作文コーパスに見る言葉の自然さ—修辞語用からの思考—」

中国人学習者の作文に見られる不自然表現を取り上げ、なぜそのような不自然さが生じるかを考察するとともに、修辞教育の重要性を述べた。

佐渡島 紗織（国立国語研究所）「作文コーパス研究における対訳の有効性—対訳が添削に及ぼす影響—」

本コーパスにおいて日本語作文に母語訳がついていることの有効性を述べるとともに、作文の添削箇所を添削の性質に基づいて分類・コード化する方法について述べた。

山下 みゆき（メリーランド大学）「日本語学習者の意見文における前置き表現の使用の実際」

意見文のなかで使用される「前置き表現」の実態を調査することで、受け入れられやすい意見文を書かせるためにはどのような学習活動をおこなうべきかについて論じた。

佐々木 泰子（お茶の水女子大学）「課題に基づく意見の述べ方—日本人大学生の場合・日本語学習者の場合—」

日本人大学生と日本語学習者の意見文を比較対照した結果、日本人学生は最初に自分の意見を述べるという傾向がみられ、これは先行研究での指摘と異なることが示された。

以上に見られるように、発表の内容はきわめて多岐にわたっており、また来聴された方々のバックグラウンドもさまざまであった。発表者とフロアとの間でも活発な議論が取り交わされ、日本語教育に関するさまざまな分野の研究者の交流を促すという当初の目的は十分達成されたように思われる。またシンポジウム終了後も、データベースについての問い合わせや資料請求が多数寄せられ、当プロジェクトに対する関心の高さがうかがわれた。

2001年3月には、データをさらに拡充（アジア10か国、1,100名分）した「日本語学習者による作文と、その母語訳との対訳データベース」ver.2を作成・公開することになっている。今後はこのデータベースに基づいて、日本語教育実践に関する応用研究を企画・遂行していくとともに、欧米語を対象とする対訳データベースの作成にも着手する予定である。

宇佐美 洋（日本語教育センター）

専門部会

「多言語環境下での年少者日本語教育を考える」

平成13年2月17日(土) 国立国語研究所講堂

参加者：146名

現在、世界的に外国語学習年齢の低下現象が起きているとされている。日本語教育においても、国内はもとより世界各地において日本語を母語としない年少者に対する日本語教育が活発化している。実践先行の現状に対して、言語発達の途上にある年少者向けの日本語教育のあり方を巡る理論的裏付けも方法論の研究も遅れていることが指摘されている。この専門部会は、年少者に対する日本語教育の実践報告を出発点に、教育の特色や問題点、現状での対応、そして、実践と研究との連携を考える意図をもって企画された。日本から遠く離れた地域で日本語教育を実践している人々と国内の実践者との連携、また、国外・国内それぞれの実践者間の連携、さらに、実践者と研究者との連携が少しでも進められることを願ったものである。報告者、コメンテーター、パネリストの現住地が、それぞれ、アルゼンチン1人、ブラジル1人、カナダ2人、米国1人、英国1人、日本4人となっているのも、様々な地域の人々の連携という点から自然なことであった。

プログラムは教育実践の場から生まれた経験知と、年少者教育研究との融合を探るということ

で、まず教育実践の報告から入った。

午前の部 教育実践報告

報告1 スペイン語・日本語・英語教育 ―アルゼンチン―

三井デリア (アルゼンチン・日亜学院初等部教頭)

報告2 ポルトガル語・日本語・英語教育 ―ブラジル―

中田 智之 (ブラジル・マナウス日伯学校 ジョセフィーナ校理事長)

報告3 英語・フランス語・日本語イマージョン教育 ―カナダ―

アイザック・シャロン (カナダ・ジャイルズ校副校長)

質疑応答 コメンテーター： 佐々木倫子 (国立国語研究所)

午前の部では、3地域において行われている年少者日本語教育の実践が、カリキュラム、教材例、ビデオによる教室活動の実際なども交えて報告された。対象とする学習者の言語は、以下のような状況にあり、多言語環境を実感させるものであった。

○アルゼンチン 母語としてのスペイン語 (必修課程)

継承語としての日本語

(家庭言語としての運用は限られている。学校では自由裁量の時間)

外国語としての英語

(保護者の教育要望があり、文部省の教育課程に含まれる)

日本語についての理解は進んでも運用能力の点で不足があり、カリキュラムを改訂中であること、アルゼンチン社会におけるバイリンガル校として道を進みつつあるとの報告がなされた。

○ブラジル 母語としてのポルトガル語 (すべての言語生活がこれで行われる)

第一外国語としての英語 (国際語)

第二外国語としての日本語 (日本とアマゾンの文化交流語)

楽しく、面白い教材と教室活動、学習者自身が認識できる特典の設定などの取り組みが紹介された。

○カナダ 母語・国際語としての英語 (教科として、読み、書き、文法、スペリング、表現、レポート作成など、基礎からの言語能力の積み上げ)

強い第二言語としてのフランス語

(主要教科学習の手段であり、学校内では第一言語の地位を持つ)

外国語としての日本語・母語としての諸言語

(ヘブライ語、アラビア語、ロシア語などの家庭での習得)

または、継承語としての日本語

生徒達は教師によって言語の使い分けをしており、日本語は中国語と並んで第三の言語として選択される。そして、トライリンガル能力育成の中での教科学習カリキュラムが紹介された。

午後の第1部では教材・カリキュラム・評価システム開発報告をテーマとして、2つの報告が

なされた。これらの報告の中の教育実践および教材等の開発で主たる対象とする学習者は、午前の学習者とは微妙に異なっている。

報告4 外国語としての日本語教育カリキュラム・日本語能力テストの開発 ー米国ー

フォルスグラフ・カール（アメリカ・オレゴン大学国際日本語教育センター所長）

報告5 第二言語としての日本語教育教材開発報告 ー日本ー

村山 勇（神戸市立港島小学校教諭）

質疑応答 コメンテーター：中島 和子（カナダ・トロント大学准教授）

外国語としての日本語教育、第二言語としての日本語教育という、学習時間もニーズも異なる年少者日本語教育の教材やカリキュラムがテーマとなった。前者では、従来のカリキュラム中心の外国語教育と、基準（スタンダード）中心の外国語教育との違いが説明され、さらに基準に基づくアセスメントが解説され、会場の興味を喚起した。後者の在日の外国人子弟に対する、第二言語としての日本語教育の報告では、受け入れの現状、教材の問題点、実践例、教科指導の困難点、教室活動の実際など、多くの情報が与えられた。コメンテーターからは、年少者日本語教育の世界的な全体像に触れるコメントも出された。

午後第2部では、パネル・ディスカッション「年少者日本語教育の展開」が持たれ、研究がどう教育に貢献できるかを考えさせる話し合いがなされた。

司会： 石井恵理子（国立国語研究所 日本語教育研修室長）

ー発達への社会・文化・歴史的アプローチの立場からー

當眞千賀子（国立国語研究所 言語教育研究部研究員）

ー児童生徒の学校における社会化過程観察の立場からー

カネギ・ルース（日本学術振興会 外国人特別研究員）

ー年少者第一言語・第二言語習得研究の立場からー

山本 麻子（イギリス・レディング大学 言語学・応用言語研究学部研究員）

時間の制約から、それぞれの研究者が自身の研究分野のごく一部を説明するに留まったが、そこでも人間の思考がどれほど社会・文化・歴史的しぼりの上に成り立つものであるか、また、教室の中での見えざるカリキュラムの姿、英国における国語としての英語力発達支援に対する言語習得研究者としての意見など、年少者日本語教育との関わりが認識される例示があいつぎ、それに基づく討議がなされた。

充実したシンポジウムであったというアンケート結果を得たが、2日分の内容を1日に詰めたような内容の濃さ、質疑応答などの時間的ゆとりのなさは反省点となった。今後も現場と研究を結びつけてほしいという要望を真摯に受けとめたい。

佐々木 倫子（日本語教育センター）